

学位論文審査の要旨

学位申請者	友澤 周子 ライフサイエンス専攻2021年度生		論文題目	クライアントの視点からみる遺伝カウンセリングにおける「共感」の概念について
審査委員	主査:	三宅 秀彦 教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副査:	由良 敬 教授		「否」の場合の理由
	副査:	佐々木 元子 講師		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	石丸 径一郎 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
審査委員:	近藤 るみ 准教授	<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている		
学位名称	博士 (学術)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Genetic Counseling)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本学位論文は、遺伝カウンセリングのクライアントの視点からみた遺伝カウンセリングにおける「共感」の概念について研究し、認定遺伝カウンセラーの支援者としての効果とあるべき姿について検討を行ったものである。遺伝カウンセリングにおいて、クライアントとカウンセラーの相互の信頼と協力的な関係が不可欠であり、その関係性構築における要因の一つとして「共感」に着目して研究が計画された。本論文では、模擬遺伝カウンセリングによる調査実験および、遺伝性疾患のある患者やその家族からのニーズを調査し、その結果を元にCGCによる支援の提案を検討した。

第1の研究では、模擬遺伝カウンセリングに参加したクライアント役の女子大学院生10名と、および遺伝カウンセラー役の認定遺伝カウンセラー5名を対象として、模擬遺伝カウンセリングを演じてもらった当日に、対人プロセス想起法を用いて、共感に関する経験についてインタビュー調査を実施した。さらに、模擬遺伝カウンセリングの体験後の考えを知るために、クライアント役を対象とした質問紙票を用いた事後調査を実施した。この調査の結果、遺伝カウンセラーは、過去の臨床経験を参照したクライアント背景の理解とクライアントの変化にあわせたセッションのマネジメントを、共感を通して行っていることが示された。一方、クライアントは共感を知覚し、この被共感体験によって、自己理解を深め、意思決定プロセスが促進される可能性が示された。

第2の研究では、遺伝性腫瘍の当事者13名を対象に、実臨床で遺伝カウンセリングを受けたクライアントに対して、半構造化インタビューを行った。この結果、中核的な被共感体験は研究1の模擬遺伝カウンセリングのクライアントと変わらないものの、臨床におけるクライアントでは被共感体験に先立つ多様な経験が存在することや共感に関して肯定的ではない経験もあることが明らかとなった。

以上の結果より、被共感体験が自己理解と意思決定の基盤となり、その一方で、実臨床においては被共感体験に肯定的ではない意味合いもあり、遺伝カウンセリングプロセスを支える「共感」は、個別的対応を含む複雑なものであるという示唆を得た。

今回の2つの研究は、いずれも研究計画から、倫理申請、対象者のリクルート、解析まで、申請者自身が主体的に行ったものである。

本研究の内容は、筆頭著者としてそれぞれ独立した論文として発表された。第1の研究中でインタビュー研究は、査読付き英文誌 (PLoS One: 2023-2024 impact factor 3.752) に原著論文として掲載され、さらにクライアント役を対象とした質問紙票調査については、査読付き和文誌である日本遺伝カウンセリング学会誌に掲載された。なお、第2の研究は、査読付き英文誌に投稿中である。

学位論文の審査にあたって、分子生物学、生命科学、生命情報学、臨床心理学、臨床遺伝学、臨床医学、遺伝カウンセリング学に精通した審査委員により構成される審査委員会を設置した。2024年1月9日に第1回審査委員会を行い、論文および参考論文を確認し、論文内容は十分であるとされたが、論文題目を含めて構成および一部の表記に対して修正意見が出された。2024年1月29日に開催された第2回審査委員会では、第1回の審査委員会での修正意見に適切に修正がなされていることが確認された。2024年2月14日に開催された公开发表会では、全ての質問に対して的確な回答がなされた。審査委員会は、本研究が遺伝カウンセリングにおいて共感の成立とその意義を明らかにした意欲的な研究であり、遺伝カウンセリング理論の基盤となりうる重要な研究と考えられ、かつ学術的にも高いレベルにあると判定した。上記の理由より、本論文が博士論文として十分な内容であると評価し、本審査委員会は、本論文をお茶の水女子大学人間文化創成科学研究科の博士(学術)、Ph.D. in Genetic Counselingの学位授与に相応しいと判断した。